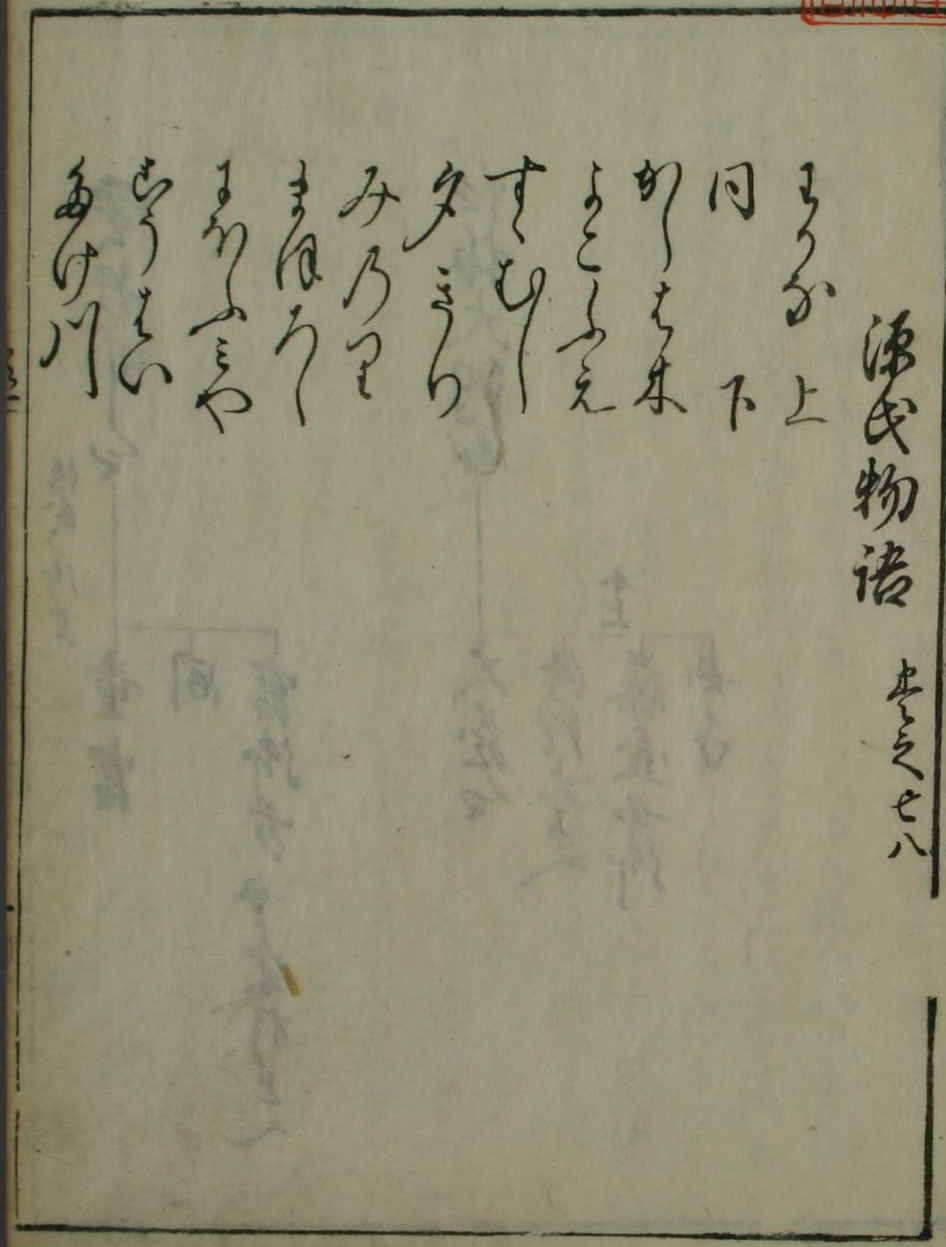
乃業工下
かしの夫 撰集元
七

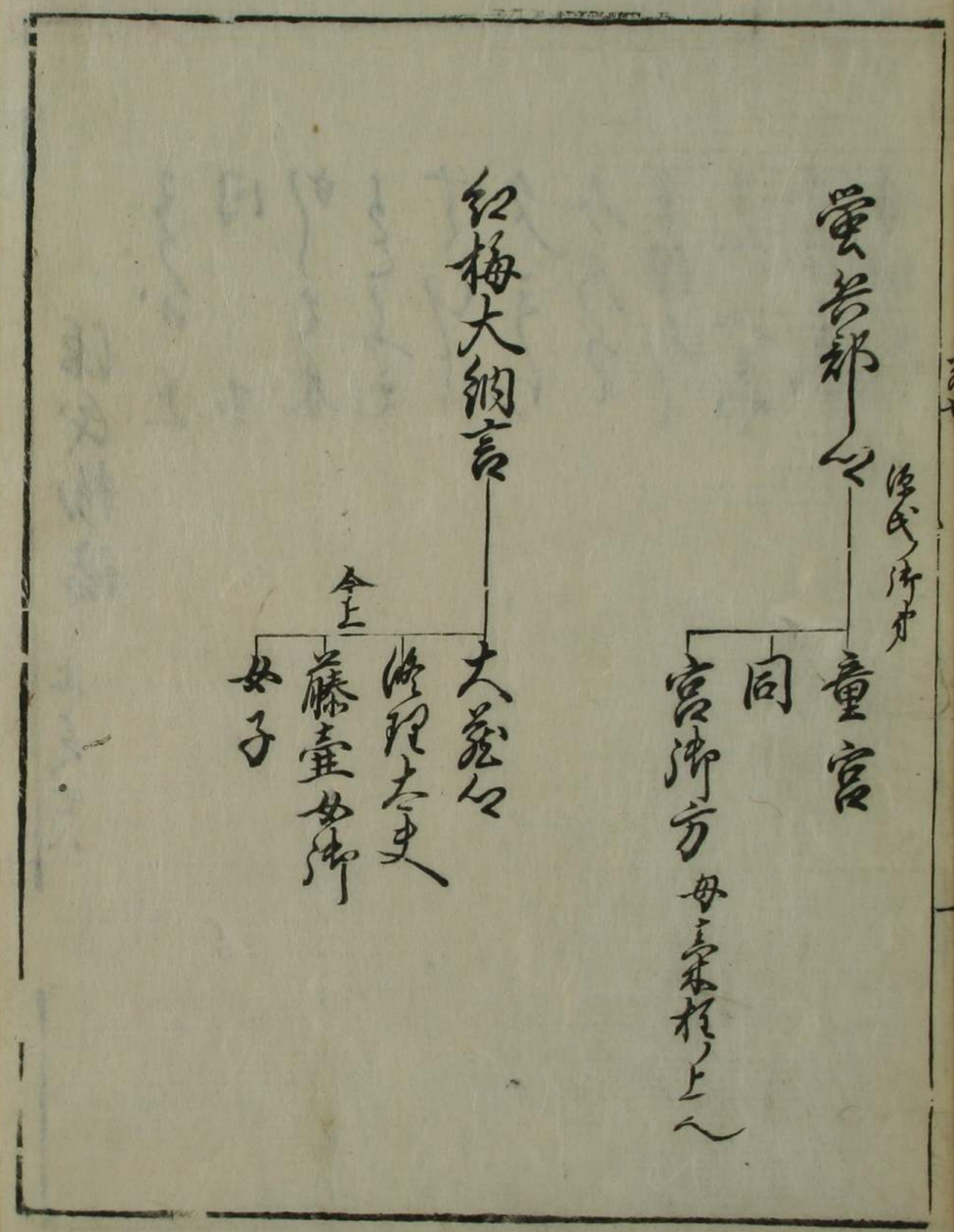
ヘ12
1087
7

宮内省図書寮

門 へ利12
号 7087
巻 7

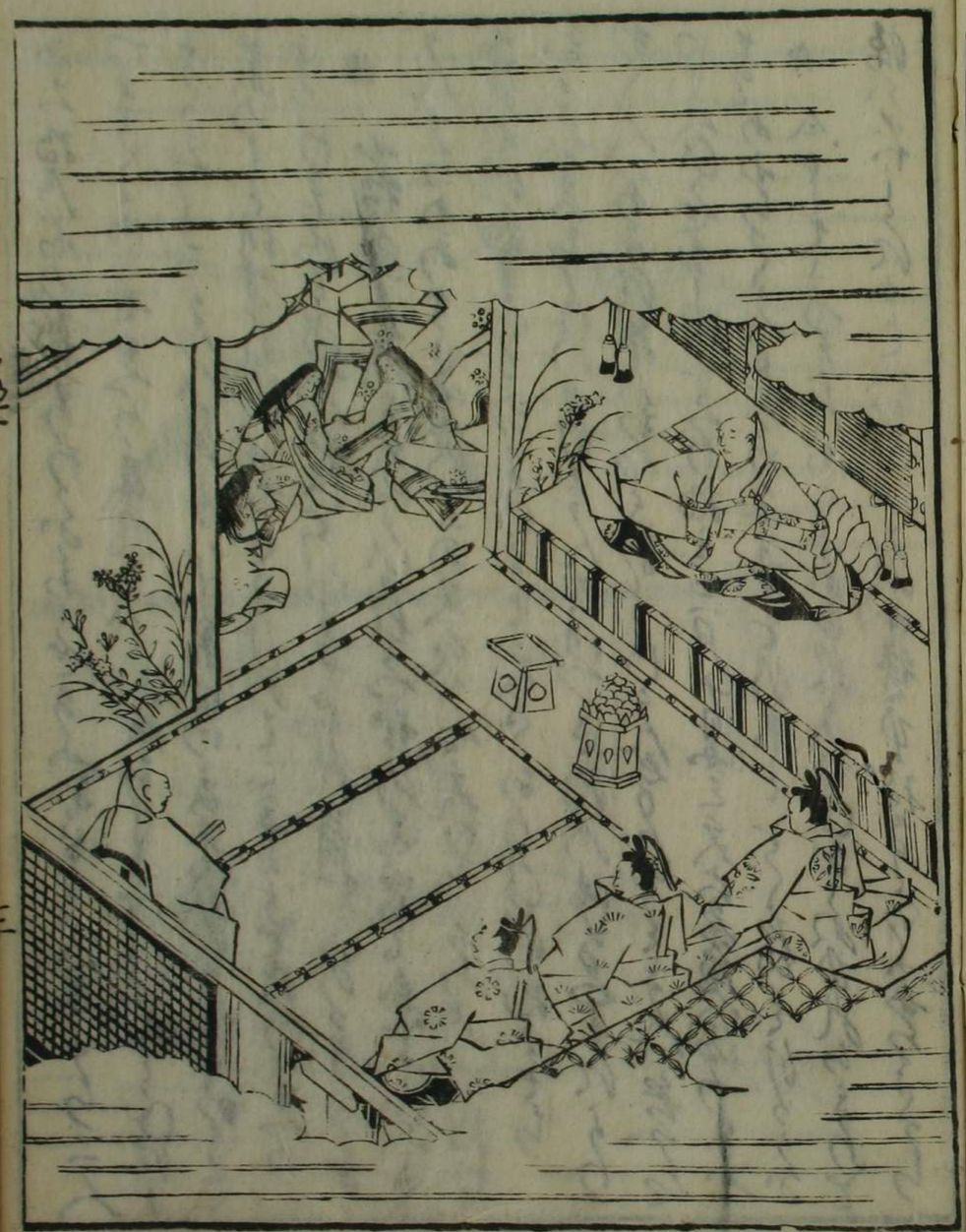
源氏物語 巻之七八





わかむ上 源氏五十九歳より翌年にかけて

院のみとしの御母さきだちてうせたまひぬること
なほあきらめがたくおぼしなげかるるに
うちつづきこの乳母の死にたること
あはれにあかずかなしくおぼしなげかるるに
おぼしつづけられぬ山の御寺に
院の御願にて
御母はこうきてんの大后
御母中納言
あはれにかなしくおぼしなげかるるに
乳母のこと
あやぶき
あとなしと
とをかの

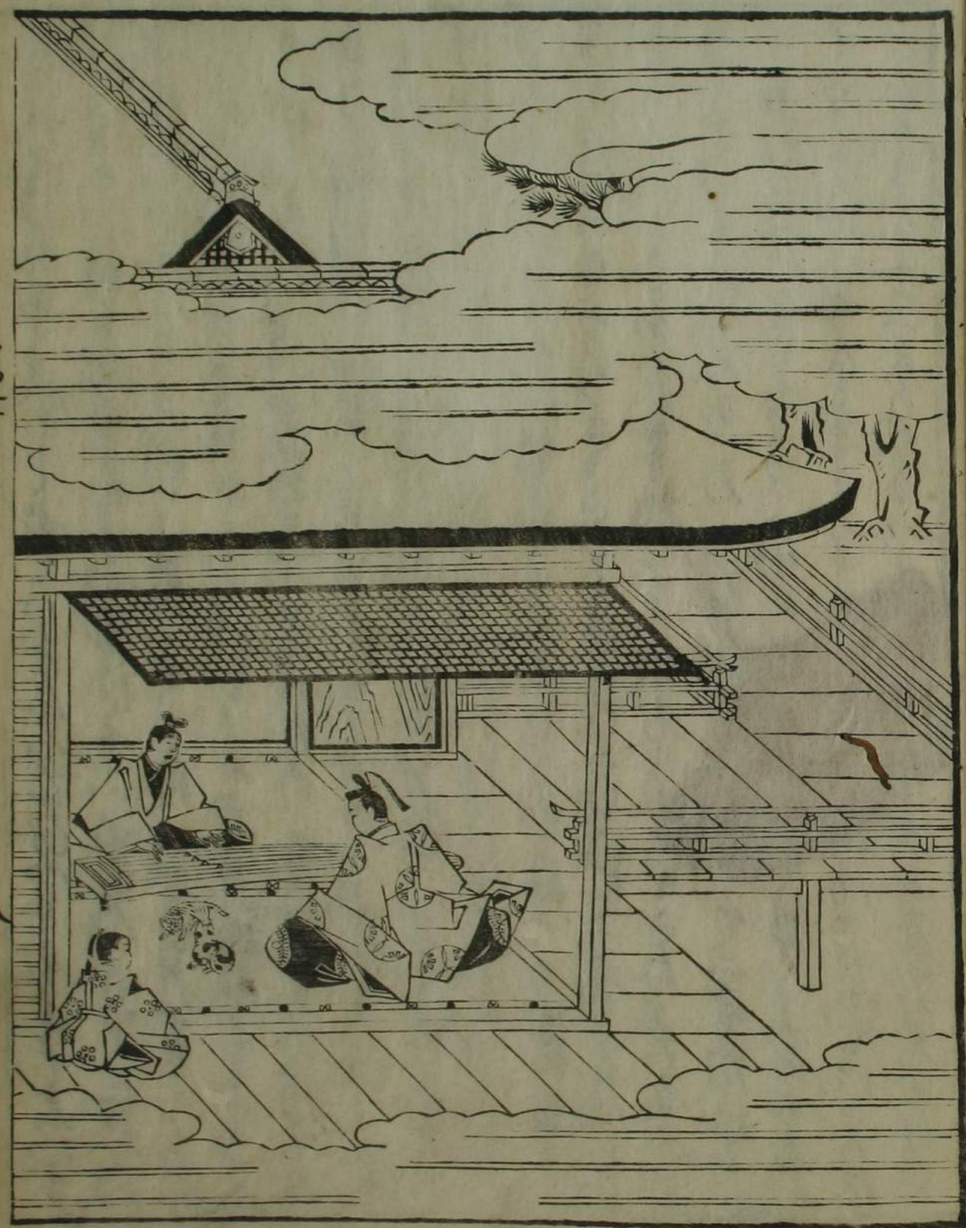


あやかりなりけるひやうかへとて源のあつまさなりせれなまひ
わかしたくさまへとそれておけ中に侍中きそせなりておけさら
源 女三 中定院へうつり程八ゑりれたんにこうかけるのおもちゝ宮
女三の宮のかく ゝあくてこか元にてそめ今さ風にまたに宮
二月に院のみかどさまの清寺にうつろひよ給ふから生ろう へ
そら ひ給ふしとせ人のこゝろへて今山にちうろうかゝうするうれ
生の上そ かゝ世のはしろめてくに清かゝる礼にとゝかそかけかゝをて
あかろ乃らんの宮は二条の宮にすこしおほしひそうれおひて
年月をすごしてそのおほ殿乃清をもせらくあつて源の
源のにせ礼をあるかれ清をにそ生もあにな人も名ふおき
月はしかつかれに出のやうとて源
志とをもまほえね摂政のもと源にみ男をさけつゝ今宮の菊をと
男をあやかちて源もの閨にてはしめ清にうちすまのきゝと
夜の清よりあつかれ娘に志たくこともさやしすに時のふ今八

清男にきひく出けるに生乃とよまりひめまへ今もうらのまに宿
めてまま女三の宮にきらのめんかまへいよいの上 如き かうへるひらは
源 男ふちらく萩やうとかん今ゝまゝ生ての出てらうひはから
水有れまたてはかまにもうかなら給萩のさしもうきともそれ
娘志八母に礼かけて女三にもとにあん母にの女三の清母く乗
上乃文武ゝ八浦見耳たり
おかの女三宮 娘志あひの波うひあつ浦まま出て志てかうわまゝと鎌て見ん
志明るにてわまま波紋のたる今ゝ源かもまちをもかれとまたやと
おうせ 世ひそくおりれ浦まとひ今もふのやうはらけしせし
三根十日の経あへこむ十れ本にはしの上わう至をいう苦ひて
うのこ八清のくあれらひうすをゐうのおりのかのや自む
内らり清ら娘中うすひみそろち大居まれもくととろうと
つにまつり生乃こまうくあ海の月を清らりまふ
あつ礼入居つうへさて今はゝ世のゝふひとゆれたかもまたへ
承とふ寺にかれしは国のあくくまへ乃ちゃくね山あしらて

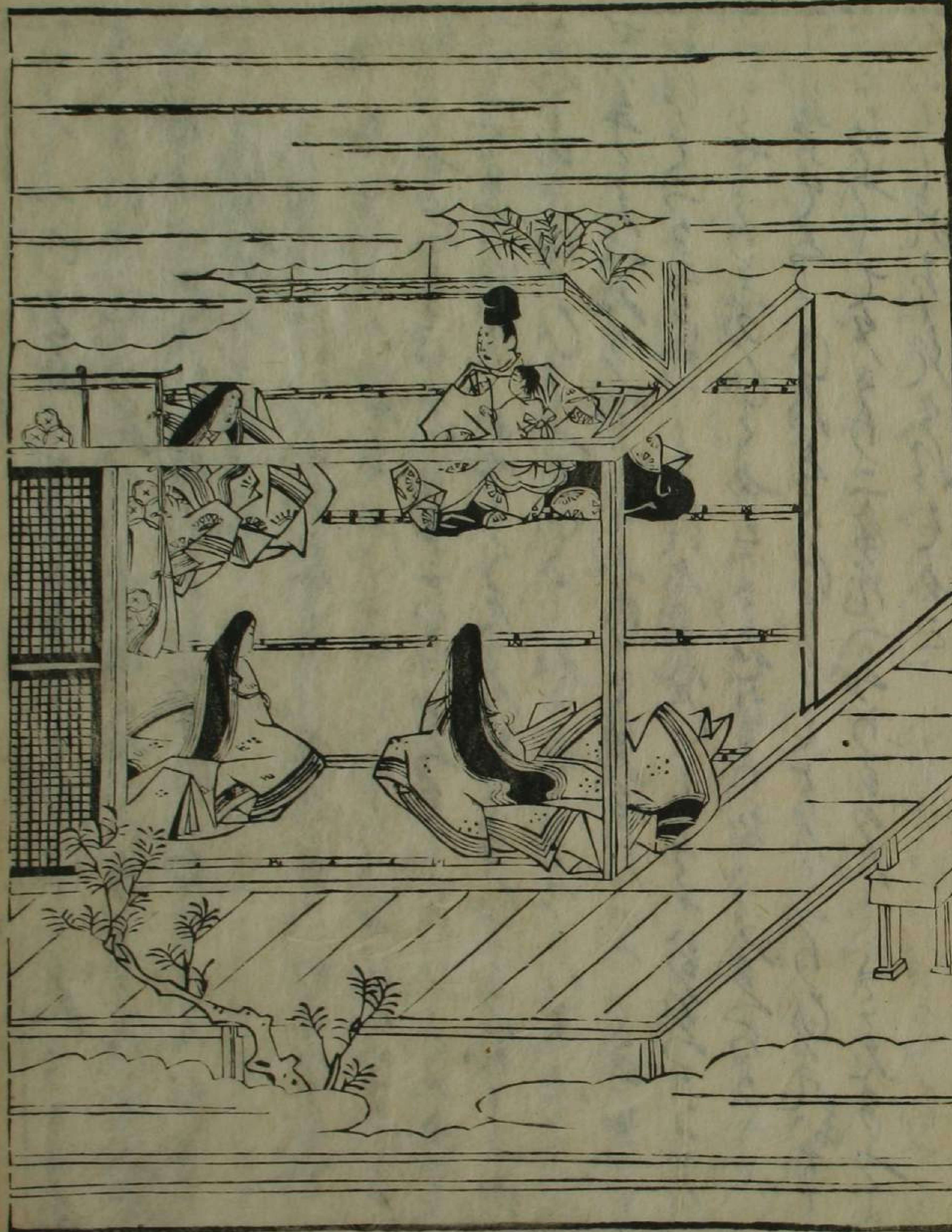
もえけるにやはら桜このちいさき花とたくさんうつ桜この花の
とひつゞきてちりたるけつつまなりくてみちものそこへあきられ
よりおけるまでにちらさきすゝきおほく立まへりくさらい
まやうえうとさきおほくかさうり流くのもとぞかさねよ
七八寸ありそおほまりまつる桜これとさくうちけるふかんくりた
まつりかわくろくうつれ人中にかんさうりんの花桜こを
まねさらせくうえいさえまえつきしくてらく
うけようくもとなりけり
大将もくりんの花ひらり車あくへ抽くらりしまふ
いつされい花ちよこつて業平桜とえて桜くらとよせ花
みやま木は桜てきよりのこゝろもいつそ花乃色あくさ
りん乃花もよいつけまもれ小侍従へ文やりまふ
よませておもれ歌さいまうけれ花のまこき花の名け
おまえ代女こそかんせられそみもの作まあけしあさせ
ら御座らす八小侍従

今はじめて見そめし山桜ちらねこそはかなけれ
わかな下　源平まじり咲也
てん上人のうちに六条院にまうでへしとて大将とけ
ちら院二人まりまうふ[illegible]とかんなまり
おそろしく成て彼桜こそなえてしかんのたへくさえ
みもうつりんとかまよ抱へるおもしろりん乃らいとてよ
まりしとたまへなりとて六条院乃桜こそおもし
それてやさうて表文八桜こそとらうたくしまへいめこよ
つまきてせらる花のりん乃らこ山桜ことかんけ花八[illegible]
おいりやさんとてみそてくりよりのひのうえうすそく
[illegible]まうつ人乃かこことなすせいあれよ作そて時の御ん
冷泉院流くねよ流りせまひて十八年にまうせまふ日ころ
とくまやまうせまふるあわりて御よおりぬきせまへりひけ
ふろの左大将大臣よ以ますふおうし此流ちくの一乃こや



まこと女宮乃御こひて女三ハこん大ねひのこしれて志やう
かしまへハ源氏を時く節ちあつしをハ女三の宮をハ大ねぶ乃
こ見たへならいさくゝ申けれそさくしき中井ちゝかの
素御れ乃ちくらちんめうらんのうて常されて細かれもみつゝへ
き源氏うちらへ女宮女房の文ハ若れ殿乃夜まかりてたのしぬ
頭氏の紀料の行ほつちらとそやまうれてけ給ふさなそ女ち
てけうりとゝ給ふへ柏木の女三の宮ハ桜木にもはしらめんもちと
すへてつけろひゝ恋もありむし八九ゆくろうつさゝちまいれ乃
頭ものも色でてよありのかはり源氏かハもみ紋六女三へ
まつさせるへりゆつさきうら世事のこしひらくとうさんひくて
しけるそすかれうくね地もいとあハきもおさかのりまるゝ
ちらて日この返しある不紋ゝるかんとて二條院つくさ
しまひ流もりまかくさきへさのこさとうりとうちりまへ
そのさ海よせんとゆきらひく源ハ女三のあつまへもわかれる後
かたへさ女三一条院まつとひまうりて六条院ハ女将けら

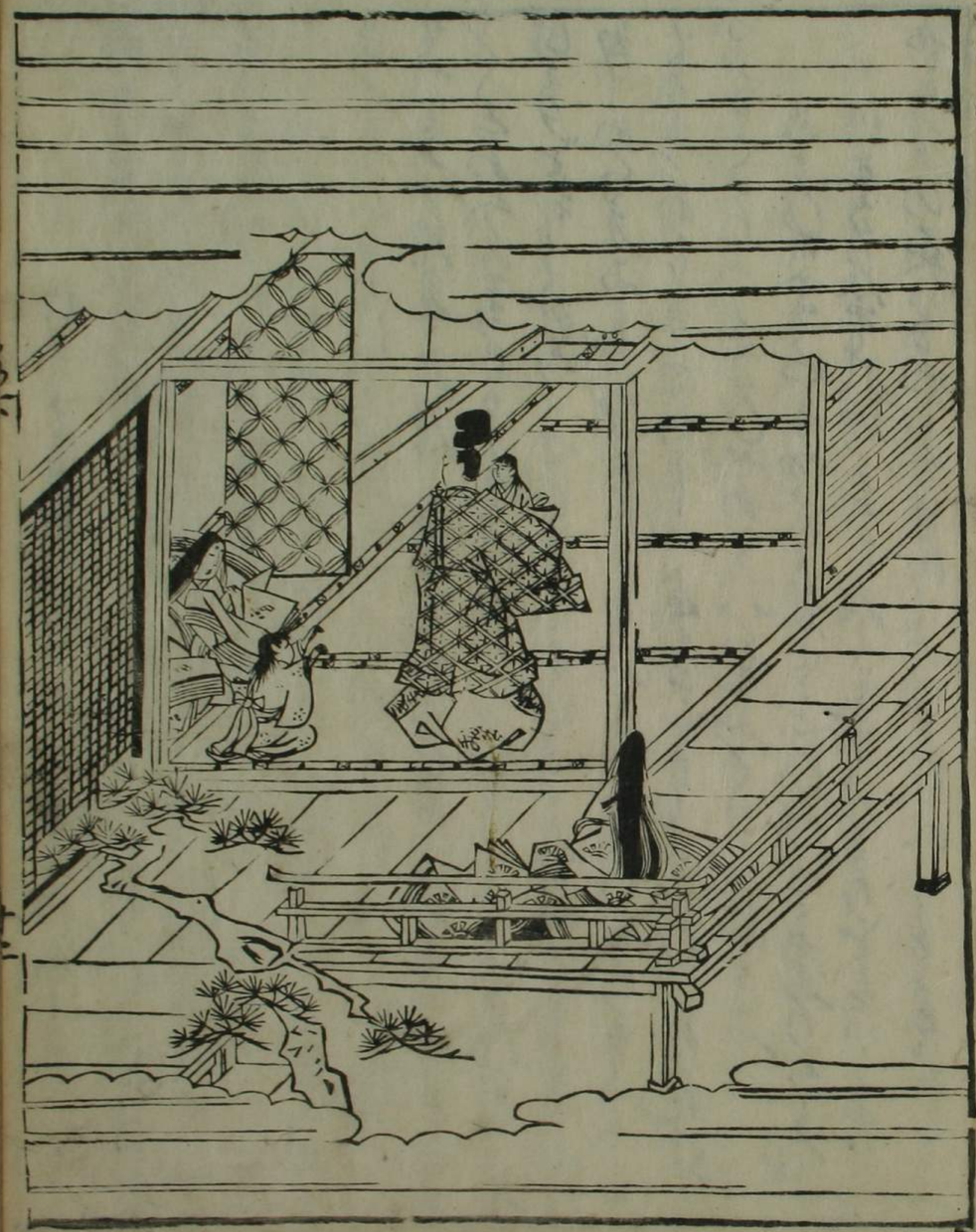
まらぬさんまとれ乃しく柏木の君のりんの三ハ中納言のかまり女三の
宮のありひ乃二の宮とえけれくらむもつつさ小侍従とらひふ
うけひ人ハ女三乃めのとのむすめへあしれのあ孫ゐ
むし柏木のめのとうれ八小侍従とよりうかりのまへへり目とよ
せあられくさうへさありとうひありとり柏木のひそ
あひうれ卯月十日あまりのほとゝへハあとのみそかかんも
て柏木ひけくしおまへ乃くハ恋めゆへ女三ハ御ゆるすへおかれ
よみこりまへたりし柏木を守ひてれハ女三ハ源乃あへつくる
しおりとえめへぬるへわさかしくあせそすれかいそうされ
うしよりつ姫よとひ志ゆひらんもとせまそていつくへも
つまとうらて月世にうれのきもさしるへてまてと
み給ふへり秘ともあけゆけハよへ下戸にハあさらすくまいれ
といそれしまへてわすかれくまりくしかしこま来
おきて乃雲もこゝまれ明けりかちてのあかれのうら袖なり
女三 明けまりのみそらをみんかくてかたてらくなりと君ハ世にやく



西しのたいめをまかれてこのかみのうちとみなの日は猶うらんて
そみちらそえらしかへてとうやかりしとて出るのたへりしき来
今年もつらはしうろわかる人あ於の御かせるかさうときおよ
女二乃宮やをたふ物待つしられしき女三まかをとのひとり
けりまとしおかかこそ
ところの物ちそを待ちとひとへんふんないはほをあきらかれゆき
おとゝ女三乃宮やかりけるのことこそておかりしうら人まの二たく
今かふそて人系かりされいはへりすゑひのさえきこゑんとこ六水ん
じやの侍従めしていのりかゞりすへりねころわかりつまさろ物
のけちらいさ給ちうりよううへりてゑかり言葉乃きやと亦せん
とんつ毎うへ法ハわさ母しくおかりてさすゑろのまとゞさひ
きうたへて海とくれその人の板の大かまとこうしわれいわらい
親男とそわれきあかれ侍まとかくそておはまさすつ是の君へ
ひひまれ生の三六とらしれはそうしおふ生乃二流てしおかし給
れんとそいうぬわりたさうてみくいとうけさせまゑ人日と見れ

けふゆうてふつくる御ゆしまふに大将やまとしくしりかれそして出ん
ゐてしられさる事さ結つく六月より時より流くしつうけるに女
三人庵にてましい乃き海かとおふせにかやりしくめくさ
もここうれかのかくさいかん
ここえ是海の将やふかくさなまうれ来主の家乃おかうかうと
保　ちぶらうとん世命あつてしまはれまちて家のくろうけか
おもく女三人かまうりあくへうり女三人かんてかくりてもまうくて流いり
てしけむまうれおもくわ中く九人あひおもくあひまつ人りて流
さるやまのさ海とひかふま又いかまいれさ海なまうつくひかふうか
せ人年こうへかうろくれにふ流うくう見まつ終いえ云ふ事し
おほしとこうこうおほりしまうれ忘れん乃りここうそておわつうされ
又おもせさうり来のひてく女三よこ世なまりおもく今へ六そうく
し結って来てく〇乃来えうれたえう〳〵と見えまへうひ丸おもし
にいらってタさらり二条院へいらりまうんとこうこんまりよ
ひつしれたりゆえれさえ女三

タ霧は神妙よせとやり見えしの源氏のくしくおさそてゆつくん
保　まい里とい女けんとくにはゆきらに月くてし乃りと出
おり女もしひと事ありまひく約とくえれ将にはらなぬりん
とそよ人乃舟代おもしてうれわへうくひまにくるうく
孫乃さとし海よひうまりあさみうれ丸をゆのくま世
舟代らて流く風とうれおもとの事え二十かねよこ扇くと流
うろふまうてうりまて云うん乃くえれ身まうりと九人まに自代
つそて女三乃宮のくえいかんと云ひまうれ結ふそておもくさ
里まひくく後又九人まひさうり先人結乃は〳〵その流おむり乃
うん今の表わまれにうりせまつてくさそておもくよう
わま丸にくによそれさうめやすまの浦よすの浦に往ふ
お海舟にいてくさたひとえれりんおゆ丸浦にあうらせし云
山乃みそこの流察十一月よ又女三乃宮なやこちまへ又女二乃こや
ゑわりまふ十二月十日わまわり女三よりあらへしとて舞乃うら
まくし比笠のよて六条院へてせまふ女流く里にあとく出流



かしは木　源氏四十八才　春より秋まで

ゑもんのかみは病おもくて年もかへりぬ父おとゞは
のいとおもひなげくもことはりなりやすからぬ思ひのほかなりとて人々
三の宮へつかはしける女三へ文まゐらせらる
今はとてもえん煙もむすぼほれたえぬ思ひの猶やのこらん
くづさぬ御かへりおとゞひとへに見てゐられけるにも御涙をおとし
てつゝみのうち身まかりたまへる人のゆかりのあはれにおもひて
くちをしく世のなかのさまをおもひしりつゝまかりぬといはまほしく
はかなく心にかゝらせたまひてせんかたなき人の御ありさまを
おしはかり給ふ女三
もろともにおもひみだるゝことのはのつゆとともにおきゐて
つれなきこゝちしたまひて世をはかなくおもふ
立そひてきえやしなましうきことをおもひみだるゝけぶりくらべに
衛門督は此御かへりを見給ひてなみだにくれたまふ
女三の宮はやがて月ごろのなやみにおはしましけるが

なりて心ぼそくおぼして世をのがれなんとおぼしたつ
またのあしたまでこそはとて源氏の御心もさはがしく
ゑい給ひて院のみかどへきこえさせたまふ
いかにもかくても今はかひなき御身なりとて
かたみ(?)に御あまになしたてまつらせ給ふ
すゑのよのためしにもなるべきことゝかなしくおぼす
さていとゞおもりゆきてゑもんのかみ
みまかりなんとすればおほやけにもをしませ給ひて
権大納言になさせたまふ今はかぎりのさまにて
ゆふぎりの大将とぶらひにまゐりたまへり
御ものがたりのついでに六条院の御けしきを
たづねたまふにおぼつかなき事どもおほくありけり
ゆふぎりはいかなることにかとおぼしめぐらすに
やがてうせたまひぬ一条の宮は中にもなげき給ふ
かくて秋のころ源氏の君わか君の御いかを
きこしめしてうちゑみながらも御なみだぐみ給ふ
おほくのとしつもりてのちの御こゝろのうちを

九重の程は雲ゐといふもいさねの松はまださかん
一条の宮は人けすくなくつれづれなる御有様も哀れ
いかなりけり　女二の宮は母君　女二は一条の宮
右大将　時しあれば[illegible]白ひかりかゞやく中の[illegible]も
三条の宮　しきは柳の[illegible]まで[illegible]の[illegible]志してねば
それよりちりし[illegible]の[illegible]より[illegible]の[illegible]
木の下に[illegible]つくはなれく[illegible]なる[illegible]
夕霧　たまは人もなく[illegible]をて[illegible]の[illegible]
弁　[illegible]や霞乃衣たち[illegible]の[illegible]
郭公[illegible]に大将一条の宮へ[illegible]
[illegible]の枝[illegible]の[illegible]
みるのつまそ[illegible]
女三の宮　[illegible]君の[illegible]
よこふえ　源氏[illegible]二首

山乃みどりより女三[illegible]
朱雀　世[illegible]は今[illegible]
女三　[illegible]世[illegible]の[illegible]柳を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
秋乃[illegible]一条の宮へおもひ[illegible]
[illegible]
乃[illegible]女二は[illegible]大将
[illegible]
女二　[illegible]
[illegible]
て[illegible]　[illegible]

露ふけきむしの音に古への秋をおもひぬれば虫のこゑかな
ことに花見も人にしられぬとも心から物語をつくる君の
女二の宮は大将にあひけるに中々雲井の雁のかたはらにて新しく
見もやしてよりの今も心をうつしおもひよる物語の大将
の宮の人の御後にむかしの心をもおもひの後物語にして
花散里の風のおとをきゝてすゑの代の物語につくりたまへ
はとかくにもいひ出たる宮は花散里とのみ心をとゞめて
おもひよるちかひをわすれぬ人にあひて夕の雲をなかめ
ありしことゝもに大将殿のいまはかなきありさまを物語にて
にほひやかに玉かつらの大将のかくれなきありさまを
とりなしてありけるやうにおもひてかのけしきにもまつ
しのびて大将殿の宮への人々のうたに大将をいさめ
おりしふしの文をひきて大将のいさめんと
乃ちみかどの文にむかし大将を心ありとそいひ侍り